

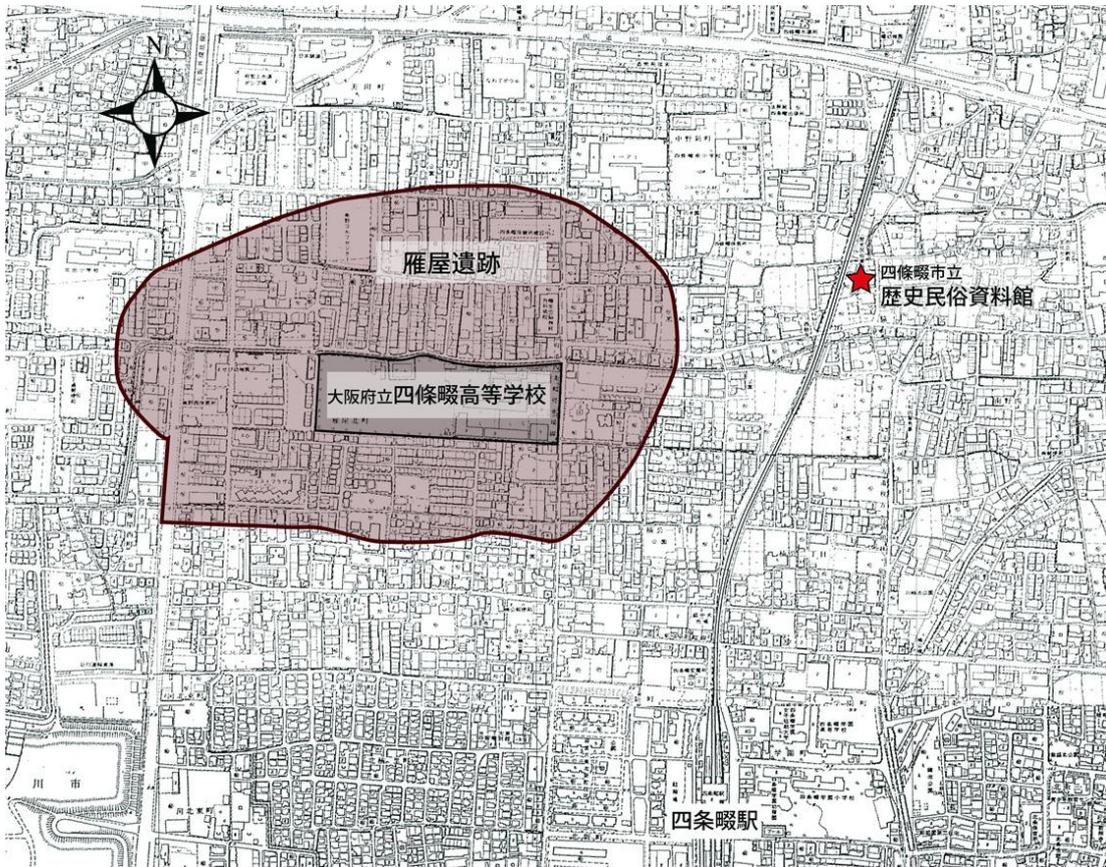
四條畷高等学校（雁屋遺跡）

雁屋遺跡の歴史

雁屋遺跡は四條畷市雁屋北町他にあります。標高約 8m の扇状地に立地します。遺跡の範囲は、四條畷高等学校を中心に、東西 740m、南北 470m です。

雁屋遺跡は、昭和 58（1983）年、四條畷高等学校グラウンド西方で行われた、四條畷市教育委員会による試掘調査および発掘調査で発見されました。地表下 2.5m の深い所から、弥生時代前期の溝や中期の甕棺が検出され、石庖丁や石斧などの石器も出土しました。

昭和 60（1985）年、四條畷高等学校北側で行われた四條畷市教育委員会による試掘調査および発掘調査で、遺跡範囲が北側にも伸びることが判明しました。この時の調査では、弥生時代中期の方形周溝墓が検出され、木棺・人骨ともに極めて保存状況良好でした。コウヤマキやヒノキ製の木棺墓中には、打製石鏃が 12 本も副葬されている例などもありました。土器の出土量も多く、遺物収納用のコンテナ（38×59×15cm）で、1,000 箱近くも出土し、雁屋遺跡が北河内最大の弥生時代遺跡であることが分かりました。



■ 雁屋遺跡位置図

昭和 61（1986）年、四條畷高等学校校舎増築および污水排水管切替工事に先立つ試掘調査および発掘調査で、四條畷高等学校の敷地全域に遺跡の眠っていることが判明し、以降、校舎改築や施設増築など、地下の遺構に影響のある工事の際は、発掘調査が大阪府教育委員会によって、実施されてきました。地中深くに埋れていたためと、扇状地による地下水の豊富なことが遺跡の保存に幸いました。

美術教師 片山長三

北河内の考古学や郷土史を語る時、片山長三（1894－1988）を抜きにして語ることはできません。彼がパイオニアだったからです。彼の業績は、昭和 28（1953）年から昭和 45（1970）年にかけて著わされた著書『長尾史』、『津田史』、『交野町史』、「枚方台地の形成から弥生時代」『枚方市史』第 1 巻、『枚方台地の形成とその前後』などで明らかですが、彼が美術教師だったことは、案外、知られていません。その彼の足跡は、平成 2（1990）年に教え子達によって作られた『みちひとすじ 片山長三先生遺稿・追悼文集』で辿ることができます。

片山長三は、明治 27（1894）年、北河内郡星田村で生まれ、明治 41（1908）年、大阪府立四條畷中学校に入学しました。授業で、石鏃の標本を見せられ、「それなら家の近くにもある」と自身の星田村旭の畑で採集した石器を学校に寄附しました。考古学少年の誕生だったようです。その後、叔父から絵具一式をプレゼントされたことを契機に画家を志し、大阪梅田の赤松麟作洋画研究所でデッサンを学び、佐伯祐三とイーゼルを並べ、絵画の修行に励みました。大正 3（1914）年、天王寺師範学校を卒業後、小学校訓導として、北河内郡の各小学校に奉職しました。昭和 6・7（1931・1932）年には、文部省検定日本画・洋画試験に合格し、文部省より中等教員の免許状を受けました。昭和 11（1936）年には、大阪府立八尾高等女学校教諭に任ぜられ、昭和 19（1943）年には、出身校だった大阪府立四條畷中学校に美術教師として転任してきました。

四條畷中学校では、昭和 22（1947）年、課外活動・考古学研究会を組織・指導し、昭和 24（1949）年には、創部された考古学クラブのために、自身の仕事場である美術準備室を美術クラブと共に部室として開放しました。その部室は、個性ある高校生達にとって、大変、居心地のいい自由な談笑の場であったと何人ものクラブ員達が述懐しています。

昭和 25（1950）年から昭和 27（1952）年には、高校生と共に、四條畷市岡山遺跡、枚方市田口山遺跡、穂谷遺跡などを発掘し、四條畷市のキリシタン遺跡の調査なども行いました。

昭和 28（1953）年には、体調を崩し、四條畷高等学校を退職しますが、その頃から交野考古学研究会を指導し、前述の著書を著わすと共に、交野市岩倉開元寺址や神宮寺遺跡の発掘などを行いました。

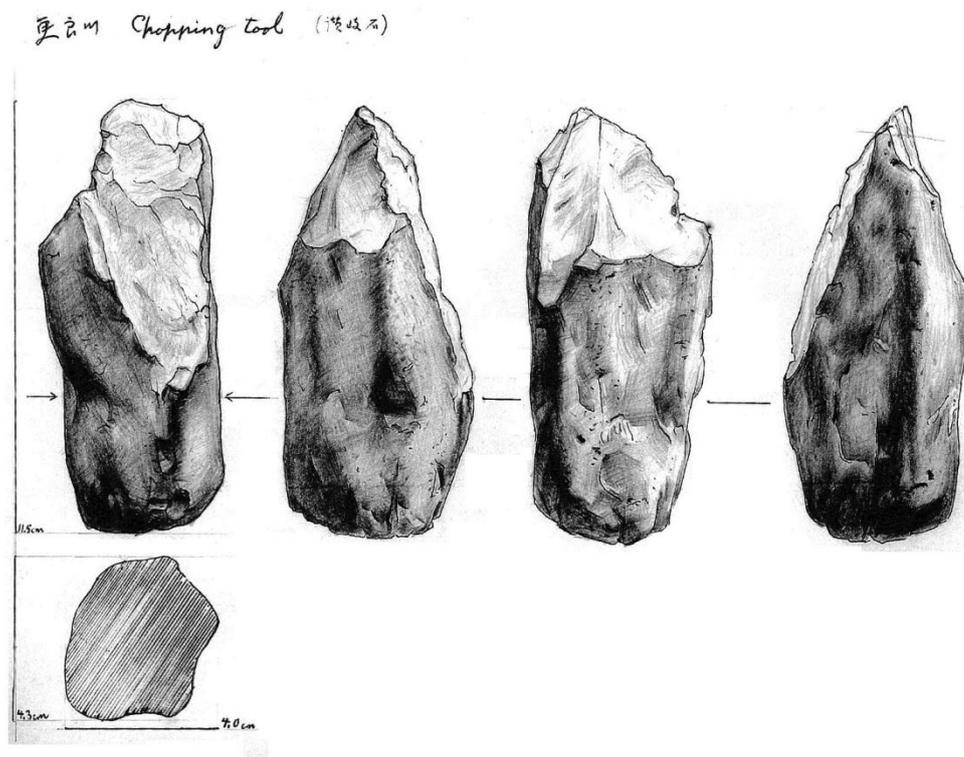
こうして発掘したり、表面採集で得た遺物の大半は、大阪市立博物館に寄贈され、展示や研究者の参考資料にと活用されています。

晩年は、歌を詠み、講演・個展を行う一方、八尾高等女学校卒業生に乞われ、ヴィーナズ会として絵の指導を始めました。また、自らも油彩・デッサンに励み、香港・台湾・ハワイ・欧州・ニューカレドニアに旅行もし、数々の作品を完成させました。亡くなるまでに、手のデッサンだけで、19,460個、自画像デッサンは、1,043作にもなりました。

学校を掘る

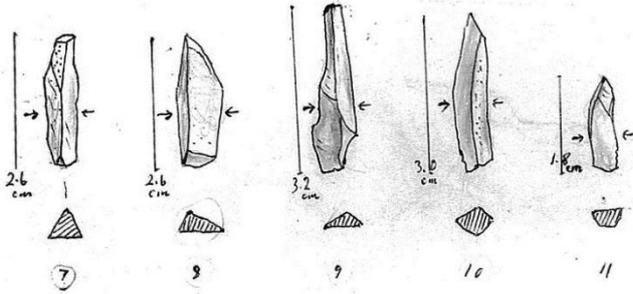
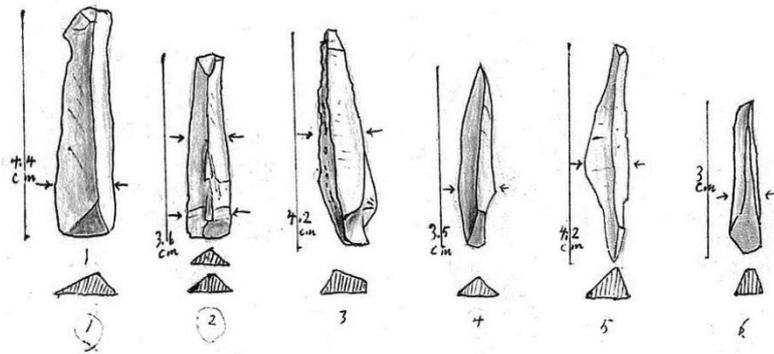
昭和 61 (1986) 年 4 月、校舎増築工事に先立つ試掘調査が、四條畷高等学校正門左手のテニスコート内で行われました。北側のトレンチでは、地表下 1.1m で厚さ 25 cm の弥生時代後期の遺物包含層が検出され、南側のトレンチからは、地表下 2.2m で弥生時代中期の土器が出土しました。土器は大きなもので、狭いトレンチ内では取り上げることもできませんでした。

この結果を承けて、同年 5 月から 11 月まで、校舎増築部分および汚水排水管切替工事に伴う発掘調査が行われました。この時の調査では、校舎増築部分の調査区からは弥生時代



■ 片山長三が描いた石器の実測図 1 (片山 光 氏 提供)

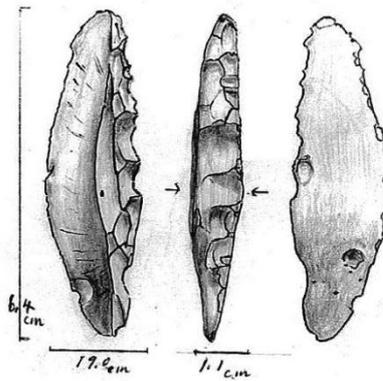
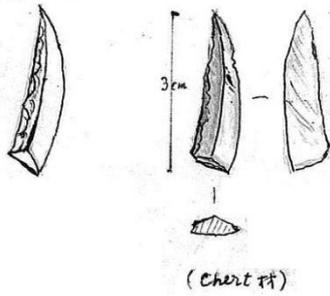
細石器 更良山



1~10 砂岩
11 ケート

藤坂 宝山 双器

竹宮子 国府式 細石器



■ 片山長三が描いた石器の実測図2 (片山 光 氏 提供)

中期の方形周溝墓が3基検出されました。1号墓の周溝内からは土器がまとまって出土しましたが、すべて一部を打ち欠くか穿孔したりして、土器の機能をなくしていました。また、奈良時代の河川が埋った上に、クスノキの樹根が検出されました。このクスノキは巨樹になったらしく、根を8m四方に伸ばしていました。しかし、鎌倉時代の水田層には、頭を出していなかったもので、平安時代のものと考えられました。取り上げの際に切断すると、芳香がしたそうです。一方、汚水排水管切替工事の調査区は、グラウンドの東端をコの字形にトレンチ調査したのですが、弥生時代後期の壺棺と共に、溝が9本も検出されました。

平成5（1993）年7月から翌年3月までは、老朽化した体育館撤去に伴う埋設管の切替工事の発掘調査が行われました。グラウンドの東端を南北に幅2mのトレンチ調査でした。この調査区の南部では、奈良時代の河川が検出され、人面墨書土器が出土しました。

平成6（1994）年10月から翌年5月までは、体育館建替えに伴う発掘調査が行われました。地表下2mの弥生時代後期の遺構面から、大量の土器と共に、竪穴住居10棟や井戸5基・溝など多数の遺構が検出されました。その内、竪穴住居2棟は、火事に遭っていました。



■ 体育館建替えに伴う発掘調査の全景



■ 弥生土器の出土状況

平成9（1997）年5月から翌年8月までは、新理科棟建設に伴う発掘調査が行われました。この調査区からは、弥生時代中期の方形周溝墓2基と弥生時代後期の竪穴住居などが検出されました。木製品として、鋤や鳥形などが出土しました。

平成13（2001）年11月から翌年3月までは、下水道管移設工事に伴う発掘調査が行われました。この調査は、グラウンドの南端を東西にトレンチ調査したものでした。自然河川が検出され、縄文時代中期の深鉢片や打製石鏃などが出土しました。

平成16（2004）年4月から11月までは、防火水槽設置に伴う発掘調査が行われました。この調査区は、正門左手の狭い調査区でしたが、遺構・遺物が希薄で、自然流路や溝を数条検出したのみでした。

絵画土器

四條畷高等学校体育館建替えに伴う発掘調査の際、弥生時代後期の遺物包含層から絵画土器が出土しました。その絵画は、一見して人物像と分るので、踊るシャーマン、鳥人？と話題になりました。両手両足を大の字に広げ、6本ある手の指は羽のように誇張され、4本指の足は踊っているようでもあります。人物像の右上にある楕円形の中心に点のある表現は、見開いた目のようでもあります。その異様な風体から、シャーマンを描いたと推

測されたのは、当然だったかも知れません。

その後、この絵画土器に接合する破片が発見され、実測して復元してみると、この土器は、口径が20 cmほどの甕と分りました。その外面の肩部に、線刻で人物像が土器焼成前に描かれていた訳です。人物像の高さは、7.2 cm、幅は6.5 cmでした。残念ながら、頭の部分は欠けていました。首の左右と股の所に、円形竹管文が施されていましたが、口縁端部にも2個、円形竹管文が施されていました。首の下の2個の円形竹管文は、イヤリングを吊り下げているようにも見えました。実は、この甕は、短く外反した口縁をもち、内面をヘラ削りし、外面をなでて仕上げているのですが、その製作技法は、大阪近辺のものではなく、他地域のものでした。従来から、雁屋遺跡では、弥生時代後期になると、近江・尾張・丹後・出雲地方の土器が出土すると指摘されてきましたが、今回の土器もそうした他地域からの人の移動に伴って移動してきたものと考えられます。



■ 絵画土器

弥生時代後期のシャーマン

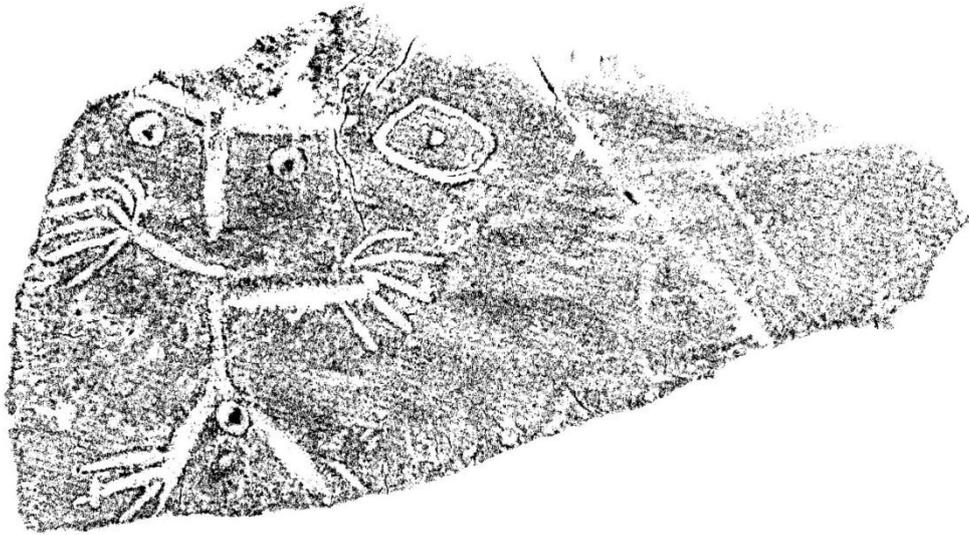
中国の歴史書『三国志』の中の「魏書」の東夷伝には、3世紀の日本列島に住む倭人の習俗や地理について記載されています。いわゆる「魏志倭人伝」と呼ばれているものです。

その中に、卑弥呼について次のような記載があります。

「鬼道に事（つか）え、能く衆を惑（まど）わす。年已（すで）に長大なるも、夫婿（ふせい）なく、男弟あり、佐（たす）けて国を治む。王となりしより以来、見る者少なく、婢千人を以て自ら侍せしむ。ただ男子一人あり、飲食を給し、辞を伝え居処に出入す。宮室・楼観、城柵、巖（おごそ）かに設け、常に人あり、兵を侍して守衛す。」

卑弥呼の宗教的性格については古くから研究者が論議を重ねてきましたが、現在ではおおむね「鬼道」を原始的なシャーマニズムととらえて、王になってからは人前に姿をあらわさず、神の「おつげ」を人々に伝えるシャーマンとして理解されています。

弥生時代後期の「王」はシャーマンとしての宗教的権威によって、社会を治めていたと考えられます。



■ 絵画土器の拓本